

徳本上人の足跡と名号碑

1 徳本上人とは

「徳本上人」は「徳本行者」とも呼ばれ、江戸時代後期、宝暦8年旧暦の6月22日（新暦では1758年7月26日）に紀伊国日高郡志賀村久志（現在の和歌山県日高郡日高町久志）に生まれました。姓は田伏、幼名は三之丞です。先祖は鎌倉幕府の有力御家人であった畠山氏とも言われています。



徳本上人は2歳の時、姉の背で初めて念仏を唱えたと言われています。また、4歳の時には友の死に無常を感じて仏教への傾倒を深くしたとも伝えられています。

徳本上人は27歳で現在の和歌山県御坊市にある往生寺で得度を受けて僧となると、想像を絶する荒修行を重ねました。やがて念仏を唱えながら全国各地へ衆生救済のための行脚を開始し、木食（穀物を食べることを断ち、木の実や草の実などを食べる修行）や真冬の水行、1日1合の豆や麦粉を口にすることで1日何万遍も念仏を唱えるという厳しい修行を行ったとされています。その姿は人びとの心を捉え、庶民はもちろん、皇族、公家、将軍家、諸大名など多くの人々の崇敬を集めました。徳川紀州家7代藩主の重倫（しげのり）は徳本に深く帰依していて、「自国内どこでも自由に布教を行ってもかまわない」としていました。また、江戸幕府11代将軍徳川家斉の実父、一橋治済も帰依が篤かったと伝えられています。

文化9年（1812）、徳本上人が和歌山の総持寺で7日間の別行（仏事）を営んだ時には、参詣者は2万人、阿波（現在の徳島県）や淡路から200隻もの参詣船が集まったと伝えられていることから、徳本の人気のほどをうかがうことができます。



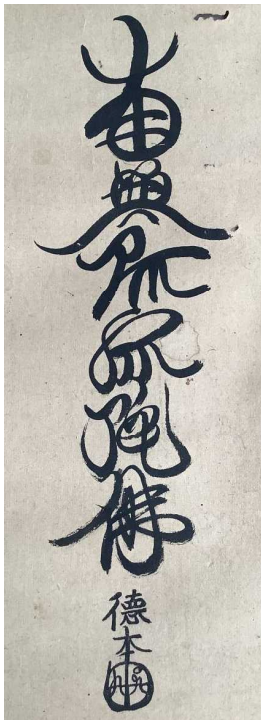
文化11年（1814）、徳本上人は江戸増上寺典海の要請により江戸小石川伝通院の一行院に移りました。一行院では庶民に十念を授けるなど教化につとめましたが、特に大奥女中の中に帰依する人々が多かったといひます。また、江戸近郊の農村を中心に念仏講を組織して、その範囲は関東、北陸から近畿にまで及びました。徳本上人は「流行神」とも呼ばれるほど熱狂的に支持され、多くの人々から崇敬を受けました。徳本上人の念仏は木魚と鉦を激しくたたくという独特なもので、「徳本念仏」と呼ばれました。

徳本上人は文化13年（1816）3月23日、武州児玉郡本庄宿（現在の埼玉県本庄市）の円心寺で「念仏百唱会」を行い、1400人ももの信者が集まったと記録されています。この念仏会を記念して翌年6月には、徳本上人独特の筆跡による「南無阿弥陀仏」の名号碑が念仏構中の人々によって建てられました。

同じ年の4月2日から4月6日にかけては、上田市の願行寺と芳泉寺に宿泊して布教を行っていたという記録があります。諏訪形の「カンカン石」はこの時の徳本上人の辻説法を後世に伝えるため、次の年に建てられたものであると思われます。上田周辺での上人の足跡は以下のとおりです（田口義称氏の資料による）。

- | | |
|------|--|
| 4月2日 | 前泊地である追分宿本陣から小諸宿、田中宿、海野宿で休憩を取りながら、午後4時過ぎに上田願行寺へ。 |
| 4月3日 | 上田藩に芳泉寺での宿泊と化益（布教）、坂城西念寺への立ち寄り、坂城心光寺での宿泊と化益を願い出て、認められた一方、坂城西教寺での請待（客としてもてなすこと）と屋代生蓮寺での宿泊と化益は認められませんでした。上田願行寺に宿泊し、3座の化益を行った（場所は不明）記録があります。願行寺泊。 |
| 4月4日 | 上田藩の役人、女性、子どもなどを対象に3座の化益を行った（場所は不明）記録があり、多くの人々が参加したと記録されています。願行寺泊。 |
| 4月5日 | 3座の化益を行った（場所は不明）記録があります。願行寺泊。 |
| 4月6日 | 2座の化益を行った（場所は不明）記録があります。上田塩尻村通行の折「十念（「南無阿弥陀仏」を10回唱える作法）」の作法を行いたいという願いを出しています。芳泉寺泊。 |
| 4月7日 | 地藏堂で芳泉寺の隠居のために「十念」を行った後、塩尻を通過して坂城中之条の西念寺へ向かいました。 |

その後、徳本上人は現在の松代を経て長野市や安曇方面を経て松本に入り、6月22日から7月1日まで滞在して生安寺を中心に化益（布教）を行いました。28000人もの人たちがそのご利益にあずかったと伝えられています。その影響もあってか、松本市内には73基もの「徳本名号塔（名号碑）」が存在しています。



徳本が書いた「南無阿弥陀仏」の字体は全体に丸みを帯びており、縁起が良いものと言われました。また、徳本が薄手の紙に書いた「南無阿弥陀仏」の名号を水に浸して飲み込むと霊験あらたかで、病が治ったり産後の肥立ちが良かったりで「拝伏名号」と呼ばれました。徳本はその生涯に18万枚もの拝伏名号を書いたとされています。上田に逗留中も9000枚もの拝伏名号を書いたとも伝えられています。



なお、地蔵菩薩の絵が描かれた紙を飲み込むことで病気などの治癒を祈願するという信仰は、現在でも東京巢鴨の高岩寺、通称「とげぬき地蔵」などでも行われています。

徳本上人は晩年、度々俳人小林一茶と旅をしていました。当時、徳本の食事は1日に1合のそば粉のみであったことから、一茶は「徳本の 腹を肥やせよ そばの花」と詠んでいます。

徳本上人は文政元年旧暦の10月6日（1818年11月4日）に亡くなりました。墓所は東京信濃町の一行院にあります。また、徳本上人が生まれ育った和歌山県日高郡日高町には現在も生家の跡や得度した寺院、上人を慕う民衆が建てた石碑などが数多く残り、当時の様子を伝えています。徳本上人の辞世の句は「南無阿弥陀仏生死輪廻の根をたたば 身をも命もおしむべきかは」でした。

コラム 徳本はふたりいた！

今回のテーマは「徳本上人の名号碑」ですが、室町時代から江戸時代の初めにかけてはもうひとり、人々からの尊敬を集めた「徳本」がいました。ここでは、その「永田徳本（1513～1630）」のエピソードを紹介させていただきます。もちろん、「カンカン石」や「名号碑」とは直接関係ありませんが、どちらの「徳本」も貴賤の区別なく人々を救おうとした、ということでしょうか。

さて、もうひとりの「徳本」、永田徳本は永正（えいしょう）10年（1513年）、三河大浜（現在の愛知県東部）の生まれ（甲斐国谷村など異説もあるようですが）で、知足齋、乾室と号しました。陸奥国で仏門に入り、出羽（鹿島という説も）では修験道を学びました。また、田代三喜、玉鼎らから、当時明からもたらされた漢方医学を修めました。



この時代はいわゆる「戦国時代」にあたり、「永正の錯乱」や「両細川の乱」など、世の中が不安定な時代でした。徳本は甲斐国に移り住み、国主であった武田信虎、信玄二代の侍医を務めました。武田信虎の領国追放後は信濃国諏訪に住みました。伝承によれば、徳本は首から薬袋を提げ、牛の背に横になって「甲斐の徳本 一服十八文」と言いながら駿河、甲斐、相模、武蔵などを回って薬を売り歩き、病人の治療に当たりました。貧しい人々には無料で薬を与えたり安価で治療を行うなどして、権勢にこびることなく人々を病苦から救ったことから「医聖」とも呼ばれ、尊敬を集めていました。また、どんな治療を行っても報酬として18文（16文ともいう）以上の金額を受け取らなかったと伝わっています。時の将軍徳川秀忠が病の時、御殿医たちが手を尽くしたものの効果がなかったときに、徳本によってたちまち平癒し、将軍が大枚の褒美を与えようとしたことに対して徳本は断り、「18文」だけを要求したなど、その人生は伝説と謎に包まれています。

徳本は本草学にも通じ、103歳のころに甲斐における葡萄栽培法の改良（ぶどうの棚架け法）も行ったとする説があります。



徳本は晩年、信州東堀村（現在の岡谷市東堀）に住み、寛永7（1630）年、118歳で亡くなったと伝えられています。これが正しいなら、驚異的な長寿と言えます。亡くなった後は現在の岡谷市長地柴宮の尼堂浄園（尼堂墓）に埋葬されました。この場所には現在も墓碑が残っており、「いぼの神様」「おこりの神様」として知られています。左の画像中央が永田徳本の墓です。残念ながら墓碑は傷みが激しく、現在はボロボロの状態とのことです。

また、上高地への旧道「徳本（とくごう）峠」も「徳本」の名にちなんだものという説もありますが、とされていますが、この「徳本」はどちらの「徳本」のことなのかは不明です。

「wikipedia」では、株式会社トクホン（現在は大正製薬の完全子会社）が製造販売している「トクホン」は「室町時代後期から江戸時代初期にかけて活動した医師で、医聖の異名を取る永田徳本から名を取った」と紹介されています。徳本上人との関連はないようです。

なお、『上田城下町歴史地名大鑑（滝澤主税著）』では、諏訪形の徳本上人名号碑について「徳本は甲州の人」とされています。徳本上人と永田徳本とが混乱したものではないかと思われます。

2 徳本上人の名号碑について

「南無阿弥陀仏」の6文字が刻まれた碑を「六字名号碑」と呼びます。「念仏行者徳本上人研究会」によると、独特の書体で書かれた「徳本上人の名号碑」は全国で1641基残っているとのこと。都道府県別では長野県がもっとも多く490基、上人の出身地である和歌山県が260基です。長野県内では長野市には96基、松本市では前にも述べたとおり73基の名号碑が確認されています。『諏訪形誌』発刊当時、上田市には諏訪形の「カンカン石」など6基の名号碑が残されていると考えられていましたが、その後、中之条に2基の名号碑があることが確認されました。さらにその後の調査で浦里地域や塩尻地区などで4基が見つかり、上田市内に全部で12基の名号碑があることがわかりました。なお、名号碑の調査にあたっては、長野市在住の田口義称さんの『長野県内の徳本上人名号塔所在地図（Web版）』を参考にさせていただきました。



3 上田市内の「徳本上人の名号碑」

(1) 通称「カンカン石」

諏訪形の徳本上人名号碑、通称「カンカン石」について『諏訪形誌』282ページから引用します。

文化14年（1817）の銘のある独特の字体で彫られた「南無阿弥陀仏」の石碑が法泉海道と道又木地籍の境に建てられています。

この石碑は徳本上人（1785～1816）という浄土宗の僧侶が、文化3年（1806）の春から秋にかけて信濃国へ教えを説いて歩いた際、諏訪形の地に立ち寄って説法をしたことの証として建てられたものです。

石碑の裏面には「願主 西心」「世話人柳澤松達・荒井政吉村中」などと彫られています。僧籍のある西心という人の呼びかけに応じて世話人の二人が中心となって浄財を集め、碑を建立したものと思われます。石材は自然石で、高さ1.5m、幅1.6m、やや菱形で厚さも薄く、叩けばカンカンと音がするので、いつしか「カンカン石」と呼ばれるようになって親しまれてきました。



平成29年（2017）5月、カンカン石周辺の道路拡幅工事にあわせて名号碑建立200年の記念祭が行われました。

注：『諏訪形誌』の「文化3年（1806）の春から秋にかけて信濃国へ教えを説いて歩いた」という記載は「文化13年（1816）」の誤りと思われます。

コラム「カンカン石」はなぜこの場所に？

これから紹介するように、上田市内には12基の「徳本上人名号碑」が確認されています。これらの名号碑の多くは寺の境内や墓地の近くなどにあるのですが、ご存じのとおり諏訪形の「カンカン石」は古い街道（別所街道）沿いとは言え、路傍の何も無い場所に建っています（中之条の名号碑のうち1基は「カンカン石」と同様に、古い街道（保福寺街道・別所街道）沿いに、越戸の名号碑も古くからの道路沿いに、それぞれ建っています）。なぜ、諏訪形の名号碑はこのような場所にあるのか、もしかしたら「カンカン石」のある場所にも寺院かそれに類する施設があったのではないかと、そんな疑問もわいてきます。

これについて、諏訪形誌刊行委員長北沢伴康さんは若いころ道普請の折などに、大正生まれの先輩から「カンカン石がある場所には小さな庵があって、仏門に入っているらしい女性が住んでいたそう」という話を聞いたことがある、と話しています。それらの伝聞などを総合すると「江戸時代、「カンカン石」が建立されたころには、この場所に小庵があり、そこには「カンカン石」建立の願主、西心（比丘尼）に連なるとされる人が住んでいて、宗教的な職能を果たしていたらしい。また、この庵は明治の初期まで残っていたようだ」という話になります。

しかし、北沢さんは「自分と同年代（昭和初期の生まれ）の人たちで、「カンカン石」の近くに住んでいた人でも、この「小庵」やその住人についての話を聞いたことがあると記憶している人はいないので、

自分の思い違いだろうか…」とも話しています。このような昔の記憶を持つ方々がだいぶ少なくなってしまった今、この話の真偽を確認することは 難しくなってしまっているかもしれません、残念です。

また余談ですが、前述のとおり道路拡幅事業によって「カンカン石」はもとあった場所から数m北側に移設されましたが、移設後、名前の由来ともなった「たたくとカンカンと音がする」の音の響きが悪くなってしまったのではないかと、この話もあります。

なお、『諏訪形誌』で「カンカン石」建立の世話人となっている荒井政吉は村役人ではないかと考えられます。『諏訪形誌』61ページにある「文化8年（1811）に無許可で旅館業を営んだとして訴えられた」4人の中には荒井政吉の名が見られます。もうひとりの世話人、柳澤松達については、よくわかっていません。

(2) 功德山願行寺（大門町）

願行寺の創建は不詳です。伝承によると、千曲川太鼓淵（岩下付近）付近の川底で村人が一光三尊の阿弥陀如来像を見つけ、当時の領主滋野氏に献上したのが始まりとされています。その後、滋野氏の後裔である海野小太郎が海野郷岩下（現在の市岩下）に御堂を造営して、松誉峯香上人を招き、この阿弥陀如来像を本尊として「功德山願行寺」を開山しました。

以来、願行寺は海野氏に庇護されて隆盛しましたが、天文10年（1541）、当主海野幸義は武田信虎、村上義清、諏訪頼重の侵攻によって討死し、願行寺もその兵火によって多くの堂宇、寺宝、記録などが焼失してしまいました。唯一、本尊の阿弥陀如来像のみが難を逃れました。



願行寺にある
徳本名号碑(中央)

願行寺 徳本上人名号碑

上田駅…550m…中央2丁目信号…450m…願行寺



天正14年（1586）、海野氏の血を継ぐ真田昌幸が上田城を築城した際、城下に峯譽道山上人（山梨県甲府市帰命院の僧侶）を招いて中興開山し、願行寺は真田家の庇護により再び隆盛し、元和7年（1621）には上田城下町整備の一環として現在の地に再建されました。また、寛永2年（1625）には住職の霊夢のお告げがあり、本尊の阿弥陀如来像を秘仏として、新たに前仏を勧請しました。

宝永3年（1706）に松平氏が上田藩主となると、願行寺は松平氏の菩提寺として篤く信仰され、広大な境内には多くの堂宇が建てられました。また、境内の一角には墓域が設けられて、藩主だった松平忠濟や松平忠固の墓碑も建てられました。

大正14年（1925）、都市整備のために大門町通りが開削された時に願行寺の境内は分断され、規模が縮小されてしまいました。この時、元和年間（1615～1624年）に造営された本堂も取り壊されました。その後、願行寺の墓地を諏訪形に移転しようという計画があった経緯については『諏訪形誌』の197ページに述べられているとおりです。以下に引用します。

また、願行寺にはもう1基、墓地内に無縁仏が集められている一角に名号碑が建てられています。この名号碑には「平成十五年春彼岸 建立」と刻まれていて、新しいものです。ただ、平成15年（2003）年にも名号碑が建てられたということは、徳本上人の教えが現代にも息づいていることの証明とも言えるかもしれません。



コラム 願行寺と諏訪形（『諏訪形誌』197ページから引用）

小牧山霊園（願行寺霊園）

上田市霊園東側に隣接する小牧山霊園建設の動きは、大正年間に、大門町通りが開通したことによって始まりました。大門町通りによって寺地が分断されてしまった願行寺は、霊園ともども他の場所に移転を図ろうと考え、この移転計画のために、昭和46年（1971）2月、神科地区山口に土地を確保しまし

た。しかし、国土交通省の高速道路計画によって、この計画は断念せざるを得ませんでした。

その後、別の土地を探している中で、諏訪形字東沢地籍が見つかり、昭和48年（1973）にその土地を取得して、同53年（1978）1月に造成が始まりました。願行寺が取得した土地には作場道が含まれていたため、昭和54年（1979）から55年（1980）にかけて、耕作者のために道路に側溝を設け、自由に通行できるようにしました。また、将来的にはこの道路を公道にするという方向で、久保田良平、増澤重治、窪田暢などの地権者や耕作者と寺側とで何度か折衝が行われました。その結果、両者は同意に至ることができ、昭和55年（1980）には協定が締結されました。地権者、耕作者側で交渉の窓口となったのは宮入源一でした。この協定が成立した後、協力費というかたちで、寺側から諏訪形自治会に、テント二張り、机、椅子、ロッカー、保管庫、公民館の照明器具（蛍光灯）など50万円相当の物品が寄付されました。願行寺は当初、この場所へは、本堂も建設する予定でしたが、昭和55年（1980）に、建設予定地の南側で土砂崩落があって地質調査を行った結果、軟弱層が深く、寺院の建築には適さないことがわかりました。そのため、寺は本堂の建設を断念しましたが、大規模な移転計画のために取得した広い土地を檀家以外の人たちにも利用してもらうことにしました。こうして、この場所は、面積8700坪（約3000㎡）、1122区画の霊園として整備されました。

現在ある願行寺四脚門は享保3年（1718）に再建されたもので、「大門町」の名はこの門があることからつけられたとのことです。門は切妻、本瓦葺き（寛永7年に本瓦葺に葺替）、正面に軒唐破風を設えた格式の高いもので、昭和43年（1968）に上田市指定文化財となっています。願行寺には寺宝も多く、鎌倉時代末期から室町時代初期作の「銅造善光寺如来一光三尊立像」は、昭和43年（1968）に上田市指定文化財に指定されています。また、「火伏せの観音様」と呼ばれて信仰されている「木造菩薩立像」は鎌倉時代初期に制作されたもので、平成6年（1994）に上田市指定文化財に指定されています。

願行寺の「徳本上人名号碑」は、大門町通りをはさんで、願行寺四脚門の反対側に設置されています。両側には「馬頭観音」と「筆塚」もあります。上田駅から歩くとおおよそ1kmの距離です。

（3）松翁山圓覚院芳泉寺（常磐城）

「芳泉寺」は天正11年（1583）、真田昌幸が上田城の築城に際して小泉郡下之条村（現在のの上田市大字下之条）にあった「全称院」を上田城下に移転して、「常福寺」と号したのが始まりとされています。真田信之が上田城主となると、この寺を真田氏の菩提寺としました。元和6年（1620）に信之の妻、小松姫が亡くなると、この常福寺を含む三つの寺に分骨され、小松姫の一周忌の際には常福寺に霊廟が設けられました。その後、元和8年（1622）には信之の松代移封に伴って小松姫の霊廟は松代城下の「大英寺」に移転されました。



小諸城主だった仙石忠政が真田信行に代わって上田に入封すると、仙石氏の菩提寺である「宝仙寺」を当地に移転し、真田氏の庇護の下にあった「常福寺」をもとあった小泉郡下之条村に戻しました。寺号が「宝仙寺」から「芳泉寺」に改められた時期は定かではありませんが、仙石忠政が小諸から移転した直後とも仙石忠政の嫡男仙石政俊の死後ともいわれています。また、江戸期には浄土宗の総本山である知恩院の末寺として、上田領の触頭（ふれがしら）の役割を担っていました。

※保福寺街道の信号は古舟橋の一つ手前

かも「徳本上人の名号碑である」という表示がされていないので、少しばかりわかりにくいかもしれません。

また、本堂を左（南）側から裏手に回り込むと「小松姫の墓」があり、参拝することができます。なお、「案内地図」の「保福寺街道の信号」には地名表示はありません。

(4) 無量院天照山専念寺（下室賀）

上田市下室賀の専念寺は万治元年（1658）に仏眼上人が開山、創建したといわれる古寺です。火災に遭っていないため、現在の本堂はその時に建立されたものですが、昭和44年（1969）にはかやぶき屋根をトタン板で覆う補修工事をしました。また、火災がなかったため過去帳が全部そろっている、とのこと。



専念寺の山門をくぐると、上田市指定樹となっている立派な松の木2本が目に入ります。この松は当寺第16世和尚の2人の弟子が明治の初期に1本ずつ植えたものです。また、境内の鐘楼西側には六地蔵が安置されています。

この寺に祀られている「聖観音像」は「池に入れられた観音様」とも言われ、かつて日照りの時はこの観音様をかつぎだし、下室賀の樋之詰大池に入れて雨乞いをしたと伝えられています。また、明治22年（1889）に室賀の村民が建立した「天明の義民・小山磯之丞」の墓碑もこの寺の境内にあります。

専念寺へは、国道143号線から室賀への道路（「ささらの湯」に向かう道）に入り、2.3kmほど行くと右手に「専念寺」の案内標識があるところを右折します。駐車場に車を置き、専念寺山門前につく道（「旧東山道」の跡と考えられています）に入ると、山門に向かって左手に大きな「名号碑」があります。



専念寺
 国道143号線小泉信号…2.3km…
 案内板…250m…専念寺駐車場

(5) 観音寺（上田原）



観音寺
 県営球場前交差点
 から約500m



観音寺は県営上田球場の近くにあり、このあたりは天文17年（1548）2月、武田信玄と村上義清が戦った「上田原合戦」の古戦場です。観音寺の伽藍はこの上田原合戦で焼失してしまったため、残念ながら寺の創建などについての資料は残っていません。本堂は約200年前に建て替えられたものとのことで、本尊は聖観音菩薩像です。また、本堂の横には大師堂と護摩堂が建

てられています。境内にある、樹齢200年といわれる大きなイチヨウの木は寺のシンボルとなっています。

六地蔵の前を通過して山門に入り、本堂に向かって左側に「徳本上人の名号碑」があります。この寺にある名号碑は、ちょっと諏訪形の「カンカン石」と似た形をしていて、親近感を覚えます。

(6) 田中山常福寺(下之条)



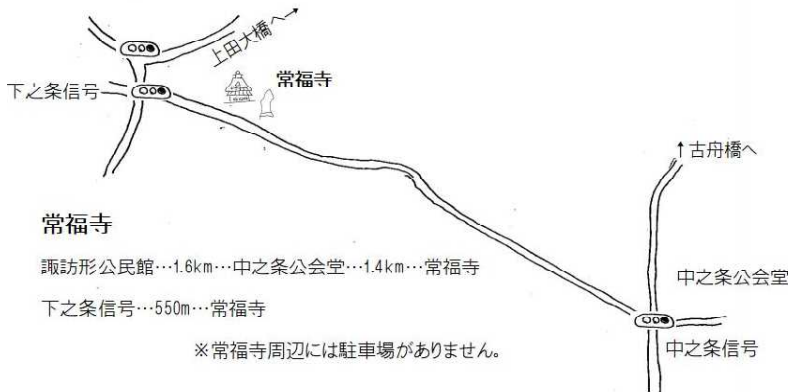
「常福寺」の開山は道公和尚と伝えられています。古くは田中地籍にあった寺ですが、真田家の菩提寺となったことを機に、常磐城の現在宝泉寺がある場所に移されました。現在の「芳泉寺」は開創時に「常福寺」と名づけられていたことは「宝泉寺」の項で述べたとおりです。

別所温泉の常楽寺、安楽寺、現在は存在しない長楽寺の「三楽寺」に対し、常福寺は大福寺、真福寺とともに「三福寺」のひとつとして人々の崇敬を集めるとともに、千曲川の「古舟の渡し」を超えて善光寺へと向かう街道の祈願

所ともなっていました。



慶長5年(1600)真田信之は、現在の宝泉寺がある場所にあった常福寺を菩提寺としました。元和6年(1620)に亡くなった小松姫の遺骨はこの常福寺に納められ、埼玉の鴻ノ巣の勝願寺と群馬県沼田の正覚寺にも分骨されました。



現在、下之条にある常福寺は、真田家に代わって仙石忠政が上田に入った時に常磐城から現在の場所に移され、再建されました。しかし、万延年間(1860年~61年)の火災によって堂宇を焼失してしまい、現在の本堂は仮本堂です。

またこのあたりは村上義清と武田信玄が激しく戦った「上田原合戦」の地で、

江戸時代になっても合戦で亡くなった人々の遺骨などが多く残されていた場所です。このようなことを地域の人々が悲しく思い、名号碑や六地藏を建立したのではないかと考えられます。

この由緒ある寺も現在は無住で中古車販売店の一部ようになっており、残念ながら寂しい寺となっています。けれども、境内に立つ「徳本上人の名号碑」と六地藏はなかなか立派なものです。訪れる場合、近くに駐車場などはないので注意が必要です。

(7) 姥懐庚申坂の名号碑(中之条)

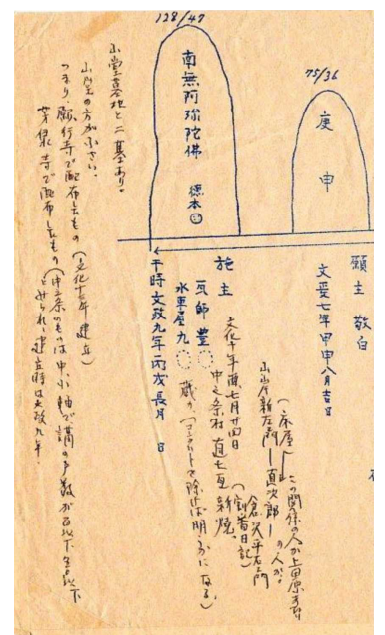
注:「姥懐(うばふところ)」は中之条地区内の小字名

『諏訪形誌』発行後、顧問北沢伴康さんの文献調査により、『中之条誌』に「中之条地区に徳本上人名号碑が存在する」という記載があることがわかりました。この記載についての調査を進める中で、中之条自治会長中澤伸夫さんと『中之条誌』執筆者(編集委員長)の中沢賢さんから、ご助言と資料提供をいただき、中之条地区には2基の「徳本上人名号碑」が存在することがわかりました。

中沢賢さんからは、故中沢恵太氏が亡くなられた後、ご遺族の同意を得て調べさせていただいたメモに、中之条にある「徳本上人の名号碑」について、以下のような記述があるという情報をお寄せいただきました。部分的に引用します。

南無阿弥陀仏の徳本上人の碑はこの姥懐のほか山堂(大字中之条地籍の小字名)にもあったことがわかりました。山堂といえば墓地や葬儀関連の道具の建物、牛の爪切り施設など個人所有でない土地がありました。国道拡張の際にその地が一部移転整備されたので、現状は現地調査をしてみないとわかりません。

中沢恵太氏のメモを解釈すれば、中之条の徳本上人の2基の石碑は、願行寺と芳泉寺で配布したものである。念仏講の参加人数は、願行寺より芳泉寺の方が多いため、碑の大きさも姥懐の碑の方が大きいと恵太氏はメモしている。建立年は山堂の碑は文化13年(1816)、姥懐の碑は文政9年(1826)である。



『中之条誌（中之条誌編集委員会2017年（平成29）刊）』に、以下のような記述があります。320～324ページから部分的に引用します。

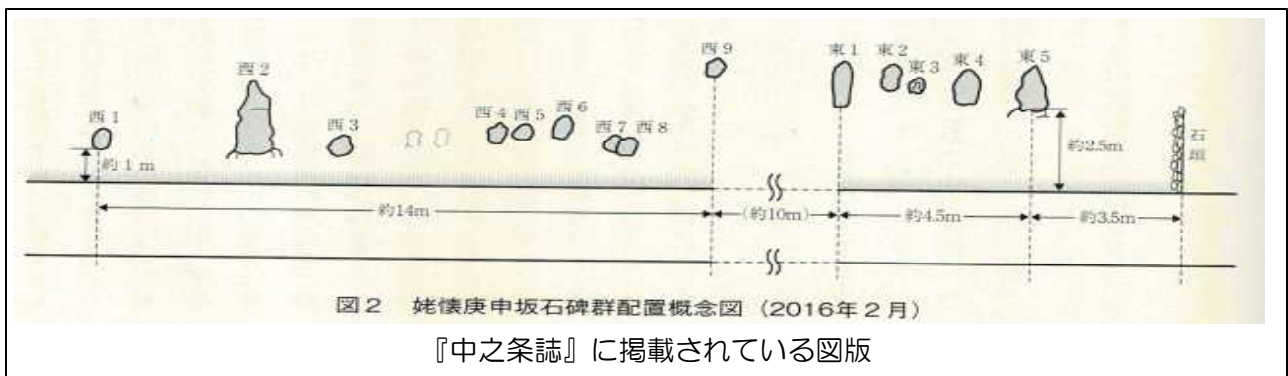
四 姥懐庚申坂の石碑群

旧古舟橋から旧町通り（東町、西町にはさまれた通り）を抜け、別所街道を進むと緩やかに曲がる姥懐の庚申坂に出る。その坂道の北側に30度から60度ほどの南向き斜面がある。その斜面に沿って2群の石碑が並んでいる。

平成20年後半頃までは中之条自治会、中之条自治会長OB会が年末の草刈り、清掃などを行っていた。現在は西側の石碑群は雑草におおわれ、東側の石碑群は繁茂する竹に囲まれている。

本石碑群については昭和後期に中之条自治会による調査が行われ、その報告書が残っている。今回（平成28（2016）年）の調査では石碑の文字等は経年変化判読が難しいので、当時の報告書を全面的に参考にした。

以上の記述に続いて「西側の各石碑」として、幅約14mに9基の石碑と、「東側の各石碑」として、幅約4.5mに5基の石碑が、下図のように並んでいくことが紹介されています。



また、『中之条誌』ではそれぞれの石碑について、以下のように記録されています。

- 西1：庚申塔
- 西2：壽水斎翁壽歳碑（1872（明治5）年）
- 西3：馬頭観世音（1883（明治16）年）
- 西4：馬頭観世音
- 西5：馬頭観世音（1883（明治16）年）
- 西6：道祖神（1927（昭和2）年、小坂井組のものを現在地に移転）
- 西7：馬頭観世音（1873（昭和6）年）
※西暦と和暦が違うので、どちらかが間違いと思われます。
年号から考えて、「明治6年」が正しいのではないかと推察できます。
- 西8：馬頭観世音（1891（明治24）年）
- 西9：馬頭観世音

- 東1：南無阿弥陀仏（1826（文政9）年）
- 東2：庚申（1824（文政7）年）
- 東3：石像（天明■■■）
※天明年間は1781年～1789年
- 東4：庚申（寛政庚申（1800年））
- 東5：奉納大乘妙典本斎翁■■■（1781（安永10）年）



「姥懐の庚申坂」東側から見た 西側の石碑群

この「姥懐庚申坂」は、旧保福寺街道の入り口付近にあたります。保福寺街道は、旧東山道をなぞるかたちで上田城下から上田市浦野、青木村、保福寺峠を経て岡田宿（松本市）までの約33kmを結ぶ街道で、現在でもあちこちに石仏群や昔の街道筋を偲ばせる景観などが見られます。「姥懐庚申坂の石碑群」もそのような、人々の往来が盛んだった場所に、街道の目印として設置されたものではないか、と『中之条誌』を

編纂された中沢さんは考えているとのこと。諏訪形の「カンカン石」も別所街道沿いと思われる場所に建立されていることとの共通点もありそうです。なお、このような石碑群は築地地区にも残っています。

「姥懐庚申坂」について、『もくず会報31号（2020年（令和2）9月10日刊）』には以下のように記述されています。

御所堤防と中之条堤防の境目辺りから川向こうに向けてかつて木製の旧古舟橋が架けられていた。その辺りは江戸時代目尻町と呼ばれ、それから宮川を越え南に向かう通りは東側が東町、西側が西町と称され、松本に通じる幹線道路松本街道（保福寺街道）として栄えた。

南に向かうその街道はじきに江戸時代の測定の起点である小字関石（現在の西沢誠さん宅附近）の三叉路を右折して西に向かう。これを曲がらず直進するのが北向観音堂道（別所街道）である。この道は上田原の段丘上へと緩く右旋回して登る。

その辺りは回り込んだ段丘の南向きの急な斜面で、北風を防ぎ冬でも暖かいので、老婆の懐のようだと親しまれ、一帯は姥懐と呼ばれ、この坂の道沿いに庚申等が並ぶので古くから庚申坂と呼ばれた。この道沿いの傾斜地には江戸時代から明治～昭和にかけて、各種の石碑石像が寄進建立され、今ではこの地の歴史を検証する、貴重な歴史遺産となっている。

8基あった馬頭観世音は農耕や運送に使ったウマの死を悼んで立てた供養碑である。

3基ある庚申塔は220年前の碑も現存、庶民の信仰を研究する貴重な資料である。

ひときわ大きい高さ2.1mの碑は、梅の水墨画の大家で文化人、中之条出身の西沢練齋翁の顕彰碑である。門弟達が明治5年（1872）に建立。当時の青年達が師を敬慕し建立した顕彰碑は近郷各地にあり当地方の教育文化史研究上重要な遺産である。

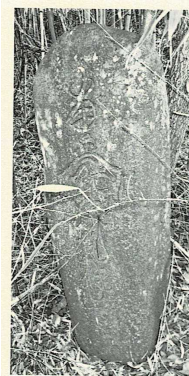
その他各種の碑を含めこの場所には240年前から昭和に至る14基の石碑が保存されており、これだけの多数の古くからの石碑の集積は東信地区でも珍しいでしょう。

執筆・資料提供：中沢賢氏 注：『もくず会報』は中之条老人会機関紙

さて、ここで取り上げたいのは『中之条誌』に「東1 南無阿弥陀仏」として記録されている石碑についてです。『中之条誌』323ページの写真（昭和の後期に撮影されたとされるもの。右の図版は『中之条誌』より）では、文字などははっきりと読み取ることができないものの、石碑の文字は徳本上人名号碑に共通する独特の書体で書かれていることがわかります。

碑文について『中之条誌』では「南無阿弥陀仏 徳本■ 施主 瓦師豊■ 水車屋九■ 文政九年である」と記載されています。また、故中沢恵太氏のメモには、この名号碑は「文政9年（1826年）に芳泉寺から配布されたもの」と書かれています。

なお、諏訪形の「カンカン石」は1817年（文化14）の建立となっていますから、姥懐名号碑の建立は諏訪形のカンカン石建立の9年後ということになります。



東1 南無阿弥陀仏

「姥懐庚申坂の石碑群」は、赤坂の信号を北（古舟橋方面）にわずかに進んだところで右（東側）側のやや狭い下り坂（姥懐の庚申坂）を少し進んだ先の道路左（北）側です。『中之条誌』で「西2：壽水齋翁壽歳碑」と記載されている、比較的大きな石碑が目につきます。また、その周囲に『中之条誌』で「西1～西9」と示された庚申塔、馬頭観音、道祖神なども見られますが、現在は行方がわからなくなってしまっている石碑もいくつかあるようです。

右写真の2軒の建物の間の道をわずかばかり下っていくと、道路左（北）側にまず、大きな「壽水齋翁壽歳碑（『中之条誌』の資料で「西2」とされている石碑）」が目につきます（左下の写真参照）。よく見ると、この石碑の周辺には『中之条誌』で「西1」から「西9」とされている石碑が点在しています。





左の写真で「壽水斎翁壽歳碑」の奥（東側）に見える竹藪の中に「東1」から「東5」の石碑があります。ただ、藪が深いので、知らなければ気がつかずに通り過ぎてしまうような場所です。

藪の東端には、比較的に見えやすい場所に「東4：庚申」と「東5：奉納大乘妙典本斎翁■■■」があり、その西側、少し離れた場所に「東1：南無阿弥陀仏（1826（文政9）年）」の石碑があります（右の写真参照）。



石碑表面に見られる「南無阿弥陀仏」の文字は徳本上人の名号碑に見られる、独特のものであることがわかります。また、碑面に彫られた建立の時期からも、「徳本上人の名号碑」と見てまちがいなさそうです。上田市内に「もう1基の名号碑」があることが確認されました。ただこの名号碑が建つ場所は私有地のため、立ち入りには注意が必要です。



なお、建立に関わったと思われる人の名前も刻まれています。どのような人だったのかについての記録は残っていないようです。

(8) 山堂の名号碑（中之条）

中之条在住の中沢賢さんからお送りいただいた、故中沢恵太氏が残した資料では、姥懐の庚申坂以外にもう一基、「山堂（やまんど）」にも徳本上人の名号碑が残っているとされています。



山堂は中之条の大字で、中之条の信号（中之条公民館南西）周辺のようなようです。信号から県道77号線を70mほど西に進むと、左手（南側）に中之条の墓地があります。現地に建つ「山堂墓地の碑」には、「1992年（平成4）から1996年（平成8）にかけての県道長野上田線（県道77号線）の道路改良に伴って、この場所に移転した」と記されていますから、墓地や名号碑があったのはこの場所ではないものの、すぐ近く、ということ

とだと思います。地図をご覧くださいいただけるとわかりますが、現在、名号碑が面している県道77号のすぐ南側の道路は旧保福寺街道と考えられていて、このあたりが当時、交通の要所であったことが伺えます。上左の写真（中之条信号方面から撮影）で、手前で見えているのが「山堂墓地」、中央やや右寄りで見えているのが石像と名号碑です。



「山堂墓地」の北西に隣り合う場所に2基の石像・石碑が祀られています（右写真）。このうち、西（右）側の碑が「徳本上人名号碑」です。



この名号碑はやや小ぶりです。故中沢恵太氏のメモにある、「山堂の名号碑は姥懐のものよりも小さい」という記述と一致します。また、氏のメモには「この名号碑は願行寺（上田市大門町）から「配布」されたものであると記載されています。この「配布された」という言葉の意味はよくわからないのですが、名号碑に刻された文字の印影が配布されていたということなのでしょうか？徳本上人の名号碑に刻まれている文字は独特なもので、拓本などが配布されてそれを刻んだ、という意味ではないか、と解することができます。

きると思います。

山堂の名号碑の裏面には「文政4年巳年正月吉日」と刻まれていることから、この年の建立であることがわかります。文政4年（1821）は、諏訪形の「カンカン石」建立の5年後です。

私たちが訪れた時にも、石碑にはお茶が供えられており、今も地域の皆さんによって大切に守られている、と感じました。



(9) 塩尻墓地内の名号碑（上塩尻）

上田市の塩尻地区は旧北国街道の面影が残る静かな町並みが続いています。明治時代には蚕種の生産で多に賑わった町筋でもあります。上塩尻地区と下塩尻地区の境目付近に虚空蔵山東福寺（真言宗智山派）がありますが、その西隣、原家の墓地内に徳本上人名号碑があります。この名号碑には建立に関する情報が刻まれていませんが、諏訪形誌活用委員会の北沢顧問によると、「台座は江戸時代などの古いものだが、碑そのものは新しいので、後から建て直されたのだろう」とのことです。

なお、東福寺について『蚕業の先駆者を輩出した上田市上塩尻の集落と民家（小林昌人）』に以下のような記述があります。



大村の集落の最も上に真言宗虚空山東福寺がある。伝えによれば、この寺は元龜2年（1517）に建てられた。それまでこの村は貧しくて寺は建てられず、仏事は坂城の曹洞宗耕雲寺と上田の浄土宗芳泉寺（上田市常磐城）で行っていた。

檀家は、耕雲寺が佐藤家、春原家、菅沼家、清水家の一派など、芳泉寺が馬場家、清水家、山崎家などである。これは現在も変わりなく、菩提は両寺に置

いていながら別に寺を建て、真言宗にした理由は、当時、耕地が狭く貧しい村を豊かにするためには学問をしなくてはならないと考えたからで、真言密教は文学・医学・工学・儒学を教えてくれるからという。この学問への熱意と学んだ成果がこの村を後に栄えさせた一因とされる。

なお、東福寺は茅葺きであったが昭和53年（1978）原因不明の火災で焼け、縁起や記録も失った。現在の本堂はその後の再建である。（编者一部改変）

(10) 稲荷・薬師堂の名号碑（仁古田）

浦里地区は、後述の越戸切り通しの名号碑や井澤さん宅裏山の「徳本上人記念塔」など、徳本上人と関わりの深い場所のようです。

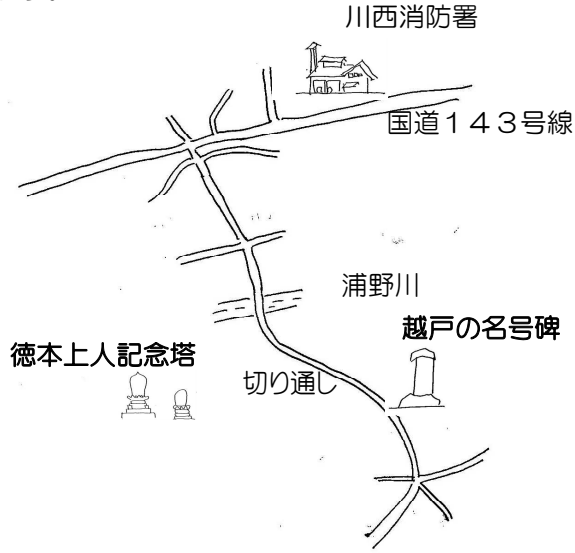
仁古田の地区内に稲荷神社と薬師堂がいっしょに建っている場所があります。この場所は地元では「薬王寺跡」と呼ばれていて、以前には寺があったようです。その参道の入口付近、鳥居のすぐ脇に、他の石碑とともに徳本上人の名号碑があります。この名号碑の側面には「文政7申年 四月六日 願主村中」と刻まれています。文政7年は西暦1824年です。



(11) 日向山墓地登口の名号碑(越戸)

越戸地区は国道143号線の南側、ちょうど山の陰になるような地域です。現在の国道143号線は、上田市から青木村へは旧東山道や旧保福寺街道とほぼ並行するかたちで続いています。この旧東山道または旧保福寺街道から越戸地区に抜ける峠越えの道は、浦野川を渡り、小さな切り通しをぬけて越戸地区に入っていきます。この「小さな切り通し」を越戸地区に入ったすぐの道路沿い東側斜面に名号碑があります。この場所は「日向山墓地登口」で、名号碑前の坂を北向きの上っていくと、古いお堂と大きな墓地があります。

この名号碑には「南無阿弥陀仏」のほか、「一億三百万遍念仏供養塔 行者本誓霊場」の文字と、建立年安政6年(注:1859)が刻まれています。また、行年八十八歳「井澤●●茂●●」の文字も見られます。

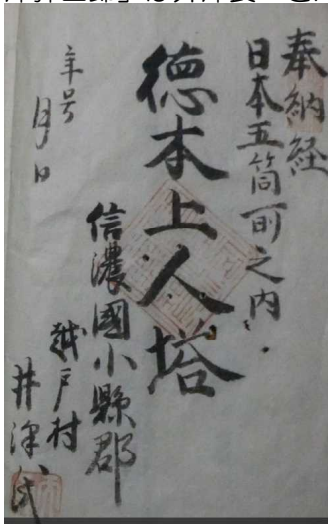


なお、日向山墓地内にある墓碑には下の写真のような、徳本上人の名号碑を模したものもあり、ここでも上人の教えが息づいていることが思われます。

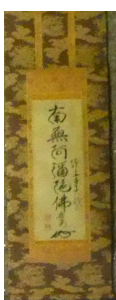
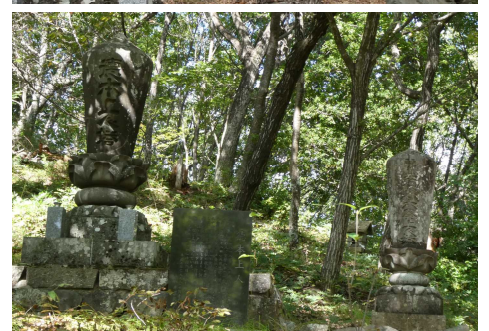


4 徳本上人記念塔

井澤良一さん(上田市越戸)の自宅北側の山の中腹には「徳本上人塔」が残っています。この塔は高さ約3m、塔の幅約90cmの石碑で、台座の正面には徳本が没した「文政元年戊寅十月六日」の文字が、横には「井澤弾四郎」の名が彫られています。「井澤弾四郎」は井澤良一さんから5代さかのぼった井澤家の当主で、庄屋を務めていました。井澤家に伝わる古文書(左写真)には「奉納経 日本五箇所之内 徳本上人塔 信濃國小懸郡 越戸村 井澤氏 年号 月日」と記されており、諏訪形誌刊行委員会の北沢委員長は「お経を納めて塔を建てたと思われる。庄屋の井澤家を中心に熱心な信者が塔の周囲に集まって念仏講を開いたのでは」と推察しています。なお、文政元年は西暦では1818年です。



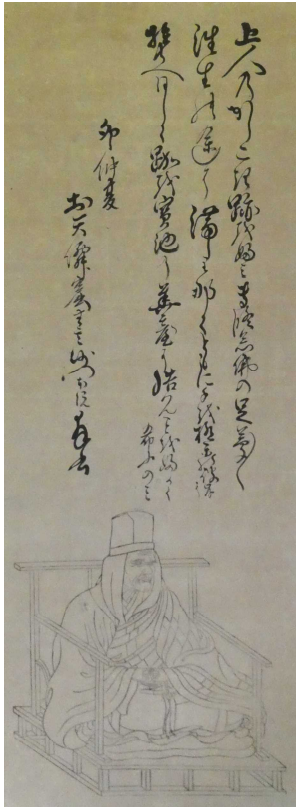
徳本上人は文化13年(1816)に上田に逗留した後、坂城や松代方面に向かい、その後長野県内各地を訪れたと記録されていることから、越戸にも立ち寄ったと考えることもできそうです。



井澤さんは「亡くなった父や祖父に塔の由来を聞いたことはない」そうですが、昔から毎年、暮れにはしめ飾りを飾ってきたとのこと。平成7年(1995)には石製の説明板を設置し、塔のひび割れを補修するなど、塔を大切に守っています。井澤良一さんは「先祖が残してくれたものなので長く保存していきたい」と話しておられます。また、徳本上人の塔の隣には、上人の弟子とされる「本悦」という人の記念塔も建てられています。

この「徳本上人塔」に行くには井澤さんのお宅の庭を通りぬけ、竹林と雑木林の中を裏山に登らなくてはならないので、詳しい地図は載せません。

5 井澤家に残る文書と掛け軸



卯仲夏
出天憫無其沙門本悦拜書

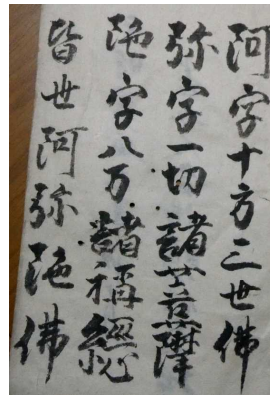
希心の三

上人乃かしこ起(き) 跡越(を) 婦(心) 三専修念佛の足夢マ
 往生能(の) 途丹(に) 滞里那(な) くとも手起(を) 極楽能(の) 彼岸に
 推ア(?) 八日夕跏(かけ) を寶寶池之花臺に結ばん事をふかく

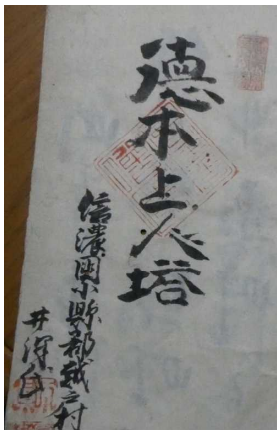
井澤さん宅には記念塔以外にも、徳本上人と関わりのある文書や掛け軸が残されています。古文書は諏訪形在住の矢島節子さんに読んでいただきました。

井澤家の床の間には左の掛け軸があります。書かれている内容は徳本上人を頌える内容となっています。また署名から、この掛け軸を書いたのは「本悦」という人と考えられますが、この「本悦」という人は上記のとおり、徳本上人の弟子とされる人物です。徳本上人図も描かれている興味深いものです。

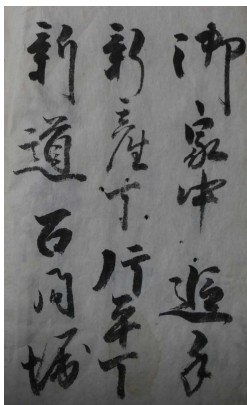
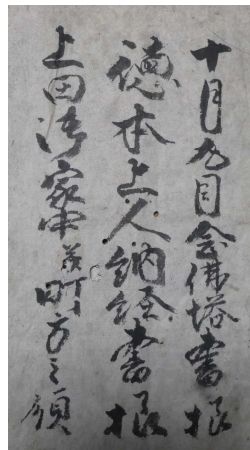
また、井澤家に残る古文書は以下のとおりです。



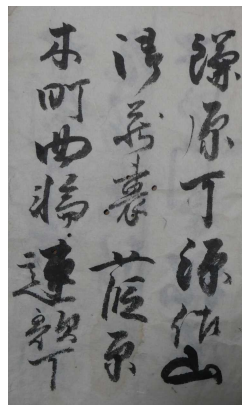
阿字十方三世佛
 彌字一切諸菩薩
 陀字八万諸稱經
 皆世阿彌陀佛



十月九日(?) 念佛塔書様
 徳本上人納経書様
 上田御家中并町方之順



御家中 追手
 新産丁 片平丁
 新道 百間堀

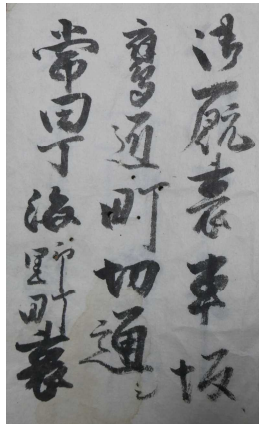


鎌原丁 源佐山
 御蔵裏 葎(?) 原
 木町 曲輪 連歌丁

御厩裏 車坂

鷹匠町 切通シ

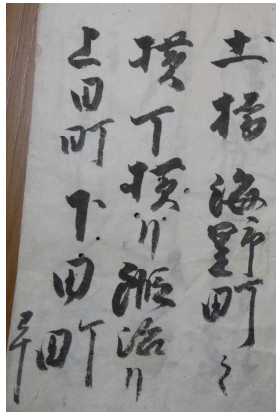
常田丁 海野町裏



土橋 海野町之

横丁横町(?) 鍛冶町(?)

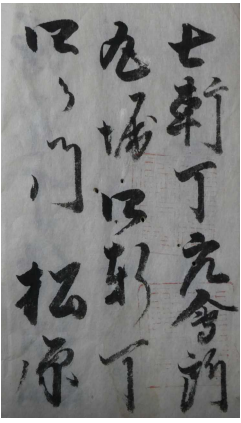
上田町 下田町



七軒丁元会所

丸堀 四軒丁

四ツ門 松原



町方之事

紺屋町 柳町

木町 原町之

